物語り

北投中心新村（中軸路から温泉浴室まで）

MRT新北投駅から丘の斜面を登り、活気のある北投温泉街から少し離れたところに、静かで緑豊かな建築群があり、それが北投中心新村です。 かつての眷村の面影を残す円形のアーチの入り口から中へ入ると、目に当たるのは村のメイン通りです。赤門、セメント瓦、緑の木製窓はこの空間ならではの配色です。幾重にも重なった建築空間は、狭い生活環境に対応して各家庭が拡張した結果で現在はこの村の特徴となっています。

北投中心新村は台湾唯一の温泉軍医眷村です。メイン通りの突き当たりは、村の中で最も特徴のある温泉浴場です。当時その風呂水は共有されており、全身つかることができず、水汲みで水をすくいて体を洗いました。

昔は今ほど温泉に浸かることに慣れておらず、温泉は硫黄の匂いがすると感じていました。お風呂待ちのスペースは大人や子供の社交場で、お風呂待ちの順番は年齢によって行列しました。それが昔の特殊な光景でした。 中央の新村に来たら、さまざまな展示会を見学するだけでなく、昔の生活の話を聞いたり、曲がりくねった路地を往復したり、ゆっくりと温泉の癒しの時間を感じたりすることもできます。

水車寮歩道

台北には、山や渓流、森、田んぼがあってまるで桃源郷のような景色を僅か 20 分で満喫できる歩道があります。高低差はわずか 30 メートルほどで、子供やお年寄りにかなり優しいです。陽明山の竹子湖にある水車寮の歩道は、毎年 3 月から 4 月にかけては海芋が満開になります。最も知られている白色の他にも、赤、緑、ピンク、紫など多彩な品種があります。そして、海芋の季節が終わると、毎年 5 月から 6 月の初夏にかけて、色とりどりの紫陽花が次々と咲きます。

実は、竹子湖は初期にイネの栽培が行われていました。水車寮歩道は元々清代の地元の住民が米を運ぶ時に通行していた古道で、水路が開削されてから農村が形成されました。日本統治時代には、総督府がここで日本人が好む新種米を栽培することを計画し、後に蓬莱米と命名した。その後、地元の農民も高原野菜の栽培を試みましたが、台湾の交通が便利になるにつれて他の山地に取って代わられ、最終的には海芋の専門栽培地となり、台北の人々にとって竹子湖の最も鮮明な印象として残ります。

三脚渡船場

多分、台北の住民の中にも三脚渡という場所を知らない人がいるでしょう。三脚渡はかつて三角点を渡る渡し船場で、街と村を結ぶ交通機能を持ち、また住民の生計を支立てる船が泊まる港でした。しかし、民国 54 年に基隆河が初めて整備されて捷水路が開削された結果、埠頭の機能は徐々に衰退し消えていきましたが、漁師たちはこの場所を三脚渡と呼び続けています。

過去の最盛期には、停泊の船は 200 艘以上もあり、しばしば 4 万トンの船が上流のほうへ向かって汐止まで進み、大量の石炭を運んできました。ここに住民はほとんどが基隆河の水を飲んで育ちました。川辺で洗濯したり、鴨の飼育したり、蜆採りしたり、魚を釣ったり、エビ捕りしたりしていました。しかし、その後は川が工業排水によって汚染され、次第に基隆河から疎外されました。人間国宝級の竜船を作る職人劉清正（アジョン師）は、「国民政府が台湾に来た後、軍艦は 30、40 艘あり、一列に並んで圓山ホテルの下に停泊していました。その中には陽字号の駆逐艦も停泊していました」と言いました。

ここに来れば、埠頭の横に数隻のサンパ船、竜船が静かに埠頭に停泊し、三脚渡と基隆河の移り変わりを見守って意義のある歴史スポットでもあります。それに台北では珍しくサンパ船が並んで泊まる埠頭になりました。

摩耶精舎（張大千先生記念館）

中国画の巨匠、張大千の「家」を訪れ、彼の生涯の最後の 5 年間のエピソードを見ることができます。一階の応接間や、食堂、大画室、応接室などを見学し、前庭、アトリウム、裏庭及び屋外スペースも見学します。全体を歩きまわしてみたら、初めて張大千の芸術功績を認識してきました。これらの空間、これらの風景は、彼の遺言に従って、彼の死後に政府に寄付され、現在は故宮博物院が管理しています。

１階の応接間は優雅な造りで、壁には1982年に受賞した中正勲章、東西画壇の巨匠 - 溥心畬、ピカソと共に撮影した写真が掛けられています。食堂には客人に出す料理を書いた「賓筵食帖」が掛けられており、過去宴席を設けて張学良夫婦や友人たちを招待することはまるで昨日のようです。大画室は水墨画の傑作『廬山図』の制作現場で作画する先生の蝋人形はまるで本物のように生き生きとしています。四面の壁には敦煌石窟前での記念写真、ご家族や先輩との写真、お母さまや師匠の書画などが飾られています。

庭園には、水がせせらぎ、池を泳ぐ錦鯉、活発な手長猿、雉と黒鶴のさえずり、生き物の生態を示します。張大千が最愛の梅の木も広く植え、流れる水、積み上げられた石、盆栽などの中庭の造景は、造園の優雅さを表現しています。直筆の「梅丘」の二文字を刻んだ巨石は自らの永眠の場所としました。裏庭の娥池のほとりに建つ「翼然」、「分寒」の涼亭に登れば双渓一帯の景色を目に収めることができ、『借景』の技法を表します。この庭園を訪れ、造園の美しさを感じれます。それは勤勉に絵を描くこと以外、もう一つの美学を貫くところです。

八芝蘭番仔井

多くの人々が天母に対しての印象はおそらく士東路周辺の観光スポットです。例えば天母野球場、士東市場、そして大葉高島屋デパートなどでしょう。しかし、よく見落とされるのは、賑やかな街区から北へ歩いて 10 分もかからないうちに、地形と環境が明らかに変わり、より静かで、より目立たないところです。天和公園に入ると、公園の奥に一つの石碑と澄んだ池があります。これはただの人工池だと思うかもしれませんが、実際に、その池は歴史的価値のある古井戸なのです。

漳州からの移民が 18 世紀初頭にここに来たとき、現在も水量の豊富な古井がすでに完成されていました。これは、この井戸が 300 年以上、あるいはそれ以上の長い歴史を持っていることを示します。漢人はこれが原住民によって開発されたことを知っており、「番井」は当時の原住民に対して使用されていた言葉でした。ケタガラン族自身の呼び名は Pattsiran で意味は温泉であり、それも旧地名「八芝蘭」の由来でもあります。文化や歴史の意義を勉強するだけでなく、木陰がいっぱい公園には、ジンジャーリリー、ヤナギバルイラソウ、紅筒花などの花を楽しむことができます。自然や人文が好きな方にとって、最高の場所です！

芝山巌神社遺跡（雨農閲覧室）

芝山公園を訪れると、薄手の靴を履いて、良い本を持参することをお勧めします。この公園で午後の時間をゆっくり過ごす価値があります。

自然において言えば、千年の時間をかけて風化作用の結果、豊かな地質景観と多くの古木を有しています。公園の遊歩道の端にある 300 年の古いクスノキはさらに公園の宝です。また、人文的には、ここはいくつかの先史文化の考古学的遺跡の発掘場であり、西隘門や惠濟宮が清代の漢人の移民の生活を証明しています。西隘門は集落間の分類械闘にちなんで、恵済宮は集落内部の祭祀活動に関連しています。日本統治時代の芝山巌神社はすでに存在していませんが、「百二十崁」の階段が残っています。当時の参拝者にとって、信者の体力を試し、神社への崇敬を示すために必要な道でした。

神社の遺跡は現在、「雨農閲覧室」となっており、これは戦後の国民政府が戴笠を記念するために設立したものです。戴笠（字は雨農）は中華民国情報部門の創設者であり、日中戦争の期間に蔣介石総統の側近であった重臣でした。戦後、戴笠の功績を顕彰する方法がさまざまです。芝山のあたりには、閲覧室だけでなく、雨農路、雨農国小、雨声街、雨声国小、雨声新村もあります。現在、雨農閲覧室は快適な読書空間です。この自然と人文を兼ね備えた空間で、静かに森林浴を浴びることができます。

大正町芸術祭物語壁画

忙しい市民道路の交差点を横切って日本統治時代につくられた路地に入り、和の雰囲気があふれています。国民党政府が台湾にやってきた後、高級エリートや行政官もこの高級住宅地に住んでいました。例えば、蒋経国元総統、板橋林家、国立台湾大学医学部長の杜聡明などでした。

戦後米国対華経済援助時代に、このエリアは米軍の駐留により、多くのバーを開業し、徐々に商店街へと変わりつつあります。台湾ドラマ『華燈初上 - 夜を生きる女たち』が 1980 年代を背景にした町でした。当時は日本の経済復興の真っ最中で、多くの日本企業が台北に会社を設立しました。ドラマ中の「光ヒカリ」ホテルは、林森北路の路地裏の Sugar Bar バーの入口で撮影されました。条通 (路地) に来たら、もしかして、ローズママやスーママとすれ違うかもしれません。

多文化の条通地区を歩いていると、文化と特色のある店を時々見かけます、再び大正町の史跡を訪れると、また物語りが書かれた壁画を見かけ、それを通じてこの地域のお店や文化の物語を勉強しましょう。

剣潭山（円山水神社）

賑やかな士林夜市の近くには秘境があります。多くの登山愛好者の秘密のルート、それがこの「円山水神社山道」です。この小道の入口は、台北自来水事業所陽明営業分所の駐車場に隠れており、歩いて 5 分もすれば、日本統治時代に残された水利設備があります。かつて台北都市圏の都市用水への給水を支えていたものの、現在ほとんど腐食しています。機器設備の横にある建物は、かつての圓山貯水池の場所であり、壁に『活水頭』という 3 つの文字が刻まれています。

さらに進むと、円山水神社があります。目に入るのは、日本の神道文化に代表的な狛犬、手水鉢、石灯籠です。神社を建てた植民者はすでに去り、神社もすでに無人の神社となっていますが、逆に日本では体験できない雰囲気と景色を生み出しています。信者や鐘の音がなく、静けさ、そして淡い寂寥感があります。中国の文人が赤壁の古戦場を見たら、「かつての英雄も今はどこに？」、「流れ行くものはこの川のようなものですが、今までに流れて行ってしまったことはありません」と感じるでしょう。台北では、最もよく知られている古跡よりも、このような空間のほうが、時間と歴史の移り変わりを感じるかもしれません。剣潭山の上へを登ると、微風の平台と北眼の平台に到着します。左右に見渡すと、視野が非常に大きく展開しています。

台湾基督教長老教会大稲埕教会

台北出身の人々は皆知っていますが、ほかの地域からの友人が訪れた場合、必ず友人を連れて大稲埕に行きます。それが甘州街から迪化街にかけて、さまざまな B 級グルメ、お菓子、乾物が散在しており、台湾の庶民の食文化を表します。

そして、台北の歴史に興味がある旅人は、台湾基督長老教会大稲埕教会を見逃すことはできません。甘州街に位置しており、日本統治時代の茶葉大実業家、李春生氏が独資で寄付して建設したものです。当時は馬偕牧師によって設立した教会のため、新たな建物を建造したのです。信仰心が深く、富裕で品味のある李春生氏にとって、教会への奉献は、もちろん最高の建材、最美のスタイルを用いるべきです。教会建築は赤レンガで作り上げ、ゴシック建築を模し、対称的な窓、小尖塔、切妻があります。外観には洗石子の装飾が施され、台湾の伝統文様も取り入れられます。

毎月第 2 と第 4 土曜日の午前中に訪れると、教会の内部を見学することもでき、専門のガイドスタッフが付きます。 礼拝堂内にはスイスの楽器職人が作った大きなパイプオルガンがあり、ストップ数は合計 40 です。 信者たちは賛美歌を歌うときにこのパイプオルガンを伴奏にします。2002 年 5 月に当時の文化局長龍應台氏らが教会の解体を阻止し、建物は「前へ移動し、修復」との合意に達しました。

「台湾は私の心から切り離せないものです！私の人生の幸福はここにあります。」馬偕牧師はかつてこう言いました。 台湾で「人生最後の家を見つけた」とも語りました。 彼がこの世を去った後、彼が設立した教会はこのような美しい家を持っているだけでなく、何百年も受け継がれ続けることができます。

嘉禾新村（メイデイの壁）-

賑やかな師大商圏から河堤の方向へ進むと、車の行き交う汀州路を通り抜け、三軍総病院汀州院区の後にある永春街に到着します。この通りには「嘉禾新村」という秘境が隠れています。

1932 年に日本人がここを公園用地として計画し、戦争の勃発とともに日本軍の砲兵連隊の基地に転用され、現在残された和風建築は当時の迎賓館と推定されています。 国民党政府が台湾に移転した後、国軍はここに連絡通信修理工場と陸軍供給司令部軍法組を設置しました。 当初は修理工場とその従業員の家族だけがここに住んでいたが、修理工場が移転してから正式に嘉禾新村に改組されました。 村の入り口にある防空壕は、1950 年代の台湾の緊張した軍事情勢を証明しており、当時は通信機器やファイルを保管していた場所でもありました。

現在、これらの歴史の痕跡は、新世代にとって思い出の宝庫となっています。赤門、レンガの壁、古い木々のある路地は、台湾のバンドメイデイの PV『人生海海』やドラマ『イタズラな Kiss2』や『16 個夏天～The Way We Were』など、多くの映像作品のロケ地となりました。その中でも「メイデイの壁」は注目のインスタ映えスポットとなっています。当時、この城壁の前の路地は、高位の将軍の邸宅を囲む「将軍巷」でした。

孫立人将軍官邸

廊下、庭園、ガラスハウス—南昌路にあるこの邸宅は、今見ると広々として静かで、高級感がありながらも俗っぽくないです。人々はここでアフタヌーンティーを楽しんだり、美術展を見たり、一席の料理を食べたりします。時々、新郎新婦がここで結婚写真を撮ったり、披露宴を開いたりもします。

日本統治時代、ここは植民地の高級官員の公邸であり、時折外国の賓客を迎えるためにも使われました。今では、このような優雅な建物は休憩や観光のために一般公開し、それはなんといいことでしょう。

しかし、「植民者専用」から「一般公開」への進化の物語は、それほど当たり前のことではありません。戦後、この邸宅はまず陸軍総司令官邸となり、最初に官邸に入居したのはは一代の名将孫立人将軍でした。

孫立人は、中華民国の陸軍二級上将で、東洋のロンメルとも称されました。当時数少ないアメリカ留学経験者でした。第二次世界大戦中、彼の功績はイギリス政府もアメリカ政府も讃えられて勲章を授章授けました。孫立仁は 1947 年に高雄に移り住み、陸軍の最高司令官と台湾防衛の最高司令官を兼任したが、後に彼は大統領から軍権を剥奪され、次に「孫立人兵変事件」の罪名を着せられ、台中の邸宅で 33 年間軟禁されていました。台北の公邸はその後、陸軍の交流会所として利用され、1990 年代の民主化以降、一般の人々も訪れることができるようになりました。

日善（防空壕）公園

加蚋仔（Ka-la̍h-á）は、台北の人々にとって馴染みのない地名であり、馴染みのある地名でもあります。南万華に位置している加蚋仔は台北で比較的早期開発された集落であり、人情味に富んだ地域でもあります。清康熙年間には八張犁、後厝仔、下庄仔、港仔尾、堀仔頭、客仔厝という6つの村が存在し、俗称『六庄頭』でした。歴史資料によれば、加蚋地域は土壌が肥沃で、開拓初期はサトウキビや花などの農産物が栽培されていました。その中、ジャスミンやクチナシの生産量が最も多かったです。1930年代にはジャスミンの需要量が減少したため、麻竹やモヤシの栽培に切り替えられ、ジャスミン、麻竹、モヤシは「加蚋三宝」として知られています。

時光の流れとともに産業が変わり、農地は既に存在していません。残されたものは、日善公園の自然を探索するだけです。公園内に入ると、まるで南万華の歴史の縮図に入るようです。第二次世界大戦中の1944年から1945年にかけて、飛行機による空襲は約15,903回に達し、投下された爆弾の数は約12万個にも上りました。台湾光復の初期に、飛行機は台北工専に移されました。現在公園の区域内には日本統治時代の城壁の石壁と、第二次世界大戦時の防空壕の遺跡が残されています。当時の空襲を回想すると、遺構の歴史的価値が一層際立ちます。公園は現在は休憩のための緑地となっていますが、その歴史的な要素は、加蚋地区の魅力を一層引き立てています。

青雲閣

華西街の喧騒を抜けて、曲がりくねった路地に入ると、艋舺地区特有の街屋様式が目に飛び込んできます。まるで異国情緒あふれる美しい佇まいの女性のようです。そして、この「青雲閣」の建築様式は私たちを魅了します。

日本統治時代の遊郭のランドマークであり、当時の台湾で最大の貸座敷でもありました。現在は文化施設として活用されています。その外壁は美しく、内部の設備や装飾も手抜きはありません。修復チームが写真や残された建材などを基に再現と保存するために、大量の史料を研究していました。

ここを歩き回って、当時の歴史的背景を知り、社会は意見の相違ではなく、多様性のある社会への進むことを認識します。「青雲閣」を後にして、清代に残された城壁の痕跡を見ることができます。さらに進んでいくと、当時の「河乃庄」の遺跡も見つけることができます。台北の水辺の憩いは、当時の人々にとってどれほど心地よかったことでしょう。それはもはや見ることはできませんが、この地域の独特の余暇活動と河川の発展は密接に関連しています。水路をたどることで、艋舺の多様な魅力に誘われています。

台湾大学内の磯永吉小屋

「台湾稲の物語」という 6 文字が木製の小屋の布帛に印刷されています。これは、訪れる人々や通りかかる人々に、粘りもあって収穫量も高い「蓬莱米」が、ここで生まれた物語を伝えるためのです。このタイワンスギで作られた木造の小屋は、現在は台湾大学農芸学系が管理と運営を担当しており、最初は台北高等農林学校およびその後の台北帝国大学附属農林部に所属していました。蓬莱米を育成した磯永吉氏は、これらの 3 つの学部で教鞭をとり、熱帯農学の第 3 講座「作物学教室」を担当していました。

就任期間、磯永吉氏と末永仁氏は稲の育種研究に取り組み、この小屋でどのように稲作を改良するかを常に話し合っていました。そして 1925 年に「蓬莱米」を成功に育成し、台湾の農業が一変し、農業所得も増加しました。第二次世界大戦が終わった後、同じキャンパスですが異なる国旗が掲げられていました。磯永吉教授は専門によって請われて台湾に残り、新世代の学生を 12 年間にわたって指導し、その後日本に戻りました。

小屋は日常の使用によって次第に老朽化し、元々は解体の危機に瀕していましたが、幸いなことに、学生たちに教授が残した貴重な手稿やさまざまな記録、調査書を発見され、この小屋はさらに農学史の研究と展示の重要な場所となり、史跡として指定されることができました。現在、台湾大学農芸学系の教員と学生は「種子の検査」を中心としたさまざまな研究を続けており、この多大な貢献をした学者を記念しています。

蒙藏文化館

チャンキャ・ホトクト（Janggya hotogtu）は中国の西北端、青海省で生まれ、チベット仏教の四大生き仏の一人です。かつては、信者は主にモンゴルと青海省に集中していました。彼の人生は移り変わりの東アジア現代史と共に一つ一つの戦争を経験し、東へ、南へと移転し、最終的には台北市の南部に落ち着き、青田街の路地で人生の最後の 8 年余りを過ごしました。彼の住居は、彼が円寂の前の遺言に従って寄付され、今日の蒙藏文化館となりました。

当時中華民国政府に忠実であった彼は、第二次世界大戦と国共内戦の期間中、政府の移転に何度も従いました。彼は「護国淨覺輔教大師」の称号を授与された、さらには総統府のカウンセラーとしても招聘されました。彼の最後の移転は、成都から台北へのことであり、多くの仏像や法具などの貴重な文物を持ち込みました。その中でも最も有名なものは、千年以上の歴史を持つ法具「Guru Chowang（咕嚕秋旺普巴杵）」で、チベット仏教では本尊仏の化身とされています。故宮博物館の専門チームによる修復作業を経て、この法具は文化館の 3 階で展示されています。

蒙藏文化館は、既存の文物を保護するだけでなく、多くの展覧会を企画し、モンゴル・チベット文化に関連する展示品を公募しています。展示内容は、財神信仰から祭りの衣装まで多岐にわたります。また、蒙藏文化館では定期的に映画祭や音楽会も開催しています。もし武侠小説の中で書かれた物語に満足せず、より一層モンゴルやチベットの宗教、芸術、生活をさらに求めるなら、蒙藏文化館は必ず訪れるべき場所です。

化南新村

秀明路一段に沿って、指南路の方向へ歩き、万寿橋を過ぎると、学術の殿堂であるキャンパス¯政治大学に到着します。政治大学は台北市の研究型大学で、人文、法律、経済など各分野では影響力を持っています。当時は交通不便の教職員のために、校外に教職員の宿舎『化南新村』を建設しました。

化南新村の最大の特徴は、二戸建て住宅とプレーンブリックで、多くの映像作品のロケ地の一つとなっています。

こちらの集落はかつて存廃の議論がありましたが、文化資産保存法に基づき、地域住民と学校側の協議を経て、全体が保存されることとなりました。ここには人文的な要素、自然、建築が密接に結びついた文化的な記憶があり、街を歩くことで詩情のある雰囲気を感じることができます。

太陽の光が赤門に照りつけ、斑点の跡が暖かい文化の包容性を示しています。ここは大学が直接管理し、「ジェンダーニュートラル学生寮」として実現しました。男女の隔たりがなくなり、化南新村生活は新たな章を開きました。

小坑溪文学歩道(小坑百年土地公)

小坑百年福徳宮の古木は、8 階建ての建物の高さがあり、木陰の面積は 75 坪にも及びます。したがって、この木陰は地元の住民にとって百年以上の間、露天の東屋と言えるでしょう。人々は朝から晩まで自由に出入りし、ここで日常の会話を楽しんでいます。この古木は、19 世紀半ばの道光年間に植えられたとされ、すでに百年以上の歴史を持つ木となっています。

この地を最初に開拓したのは、今でもこの地に住んでいる鄭氏の一族で、張氏や高氏の一族の子孫と共にこの土地公廟を管理運営しています。福徳宮の中には、完成年代によって人形石、石刻神像、木彫り神像の三尊の神像が祀られています。石頭公は初期の開拓者が発見した人形石で、石像は信徒が神に報いるために刻んだものですが、土地公は位置を変えることを望まず、石像は横に祀られることになりました。最後に完成した木彫り神像も、ほかの二尊と並んで香火を共に受けています。

この歩道は小坑溪文学歩道と呼ばれ、道の脇に詩詞によりつくられた風景が多く見られるためです。自然の景観や花鳥虫魚だけでなく、川沿いにあるという利点を活かして、親水階段を設置し、親子家族が川で水遊びをする姿が見られます。澄んだ川の中には魚やエビが群れており、この歩道には独特の魅力があります。

景美里民活動センター

景美老街（旧市街）に入ると、ここは人々の声が響き渡る景美の夜市周辺とは異なり、静かな環境が人々をゆっくりと歩かせ、一休みを楽しませます。育英街 57 巷の路地に入ると、目に映ったのはレトロな住宅で、親しみやすい里長が暖かく迎えてくれます。「ここ以前は国防住宅で、住民が移転した後は空き地となり、申請を経て景美里民活動センターとなった」と話します。里長は、当時住宅がゴミで山積みになり、地域住民の協力を得て暖かい活動センターに変身することを思い起こしました。

よく見ると、住宅には古い物を再利用した巧みな構想が隠されています。低い壁に置かれた花瓶は、かつてのラジオスピーカーであり、玄関脇の一列の装飾は、50年以上の交番の通報ベルボックスです。また、電動ポンプがない時代の手動の津田式水ポンプは、最適な水汲み設備でした。さらに、樹齢100年の梅やパンの木は、数え切れないほどの年月をかけて、それぞれの世代に静かに寄り添ってきました。

この活動センターでは高齢者が外出して活動し、一生涯学び続けることを奨励するために、共同食事と学習のサービスも提供されております。地元の母親たちは常に得意料理を何品か用意し、地元住民に提供します。また、住民の誕生日を迎えるたびに、一緒にお祝いをします。この重ねた思いやりの中で、近隣の絆はさらに深まり、景美里の気持ちが一緒に凝縮されていると考えられます。

錫口(彩虹)埠頭

松山駅は、今日の台北都市圏において重要な交通の要所の一つです。通勤ラッシュ時間帯には多くのサラリーマンや学生がここに乗り換えています。考えてみれば、今から 200～300 年前、ここは既に交通の要所であり、ここにの乗り換えるのは時間を超えての対話と体験の一つでしょう。

松山が交通の要所となった理由を理解するためには、「錫口」という意味が一見理解しづらい古い地名から話を始める必要があります。当初、バサイ族の Malysyakkaw 社は、泉州移民によって「貓里錫口社」と漢訳され、さらに「錫口」と略称されました。Malysyakkaw の本来の意味は、川の曲がり角を指します。当時は商用埠頭として設けられ、三艋舺と呼ばれる萬華に次いで繁栄していました。したがって、台湾初代巡撫劉銘伝が台湾鉄道の路線を計画する際、ここに駅を設けました。日本統治時代に入ると、何度か増設が行われましたが、交通や産業の移り変わりに伴い、水運は主要な交通手段ではなくなり、埠頭は一時衰退しました。近年、政府が再建を推進し、周辺の親水歩道と組み合わせて、台北市民のレジャースポットとなっています。

松山文創園区(松山タバコ工場の『工場の歌』石碑)

松山文創園區は、台北市信義区に位置し、2022 年にグーグルマップの世界の人気検索先トップ 10 にランクインしました。かつての松山タバコ工場の 6.6 ヘクタールに残され、その建物と史跡エリアが、クリエイティブが集まる場所である「松山文創園區」に転換され、素晴らしい文化的な展示会やイベントなどが行われています。松山文創園區は、台北文化体育園区の重要な文化的歴史的な中心であり、国内で重要なクリエイティブ拠点であり、国際的に有名な文化スポットでもあり、台北市のクリエイティブ外交の名刺でもあります。

松山タバコ工場の精神を歌った「松山タバコ工場の『工場の歌』石碑」が現在も保存されており、松山文創園区の台湾デザイン館の正門の左側に位置しています。石碑の歌詞は作詞家の何志浩氏が書きました。何志浩氏は 1949 年に台湾に来て、中華民国陸軍中将を務めました。73 文字の工場の歌は、台湾経済史上最も伸びる業界の輝きと台湾ドル 210 億元の生産額を記録した「松山タバコ工場」を歌っています。

タバコ工場時代の従業員の労働精神を賞賛し、生産量を増やし、国に奉仕し、国家の栄光のために努力していました。『2023 年 SONGYANLAND FESTIVAL』で芸術家、呉柏賢は松山タバコ工場の工場歌に新しい曲をつけ、ダンサーの賴舒勤と黄有芳とともに当時の展示会でパフォーマンスを行い、タバコ工場時代を追想し、記憶にとどめます。

糶米古道

台北市の南東方に位置する吳興街は、非典型的で人手が多い通りです。前半は朝から晩まで露店が営業している賑やかな通りですが、一つの曲がり角を曲がっての後半はまるで静かな小さい町のようです。山へ向かって約 700 メートルの石段の道があり、全部で 500 段あります。この石段の道はかつてここから南港、木柵、深坑及び景美などへの米運びの近道で、糶米古道とも呼ばれています。

この古道は、台北の早期の歴史発展の重要な証です。現在、現代化された台北市街には、この米道古道だけでなく、三張犁と南港山系のこの辺にも、茶路古道、土地公嶺古道、拳山古道などの古道があり、昔は農民が農産物を運ぶために使われていました。整備された後、米道古道は平らで明るく、天然林が道を挟んで、空気が清々しく、途中には池などの驚きの景色があります。さらに、短い道のりには、財神廟、地蔵殿、土地公廟など、台湾の民間信仰の基礎となる小さな廟があり、これらはコミュニティや産業と密接に関係した廟であり、この古道に昔から頻繁に移動していた商業人の足跡を見ることができます。

胡適記念館

学校で必ず学者胡適について勉強したことがあります。胡適は新文化運動の提唱者であり先導者でもあります。学校の教科書を通じて彼が寛厳よろしきを得た心を持つ母親がいることによって彼自身の処世の道に深い影響を与えました。しかし、人に知られないのは、この中国思想史における重要人物が、台北にある一軒の洋館で人生最期の 3 年間を過ごしたのです。

胡適の旧居は、総統府と中央研究院が共同出資して建てられ、当時流行いていたアメリカスタイルの間取りが採用されました。現在でも胡適の最期の 3 年間の日常生活の様子を保っており、彼の死後、胡適記念館として改装されました。旧居の隣には墓地と展示室があり、展示室は胡適の著作、手稿、写真、遺品、記念品などを展示しています。

欧米では、有名人の部屋はしばしば重要な観光スポットとなっており、人々はここで有名人がどのように考え、執筆し、行動するかを想像します。それに、有名人の墓地や文物館も多くの人々が弔問に訪れています。台北では、胡適の部屋、墓地、文物館が同じ場所にあるため、彼が代表する時代に憧れているか、単に教科書に載っている有名人について詳しく知りたい場合ならば、この記念館は最適です。

新福本坑

あなたは山のほうには多くの秘密が隠されていることを知っているかもしれません：木々、虫や鳥、そして山によって生まれた産業や集落の遺跡。知っているのに、これらの秘密の宝物を自らの目で見ないのはもったいないのではないでしょうか？

こういう時、内湖の碧湖親山歩道は良い選択肢です：高低差は 50 メートルに満たず、30 分もかからずに歩き終えることができる距離です。花の季節には、歩道上でホリシャルリマダラ、ツマムラサキマダラ、キチョウ、アオスジアゲハを見ることができます。途中にはソウシジュ、大葉楠やさまざまなシダ類があり、タイワンアオカササギを観察するために専用の東屋もあります。人文景観において百年の鉱業の歴史を見守ってきた新福本坑は、人々に想像の世界に誘います。自分が勤勉な鉱員の一人であることを想像し、再建された台車やレールなどを利用し、小さな冒険をしましょう。台湾の多くの鉱山と同じ運命があるかもしれませんが、人の命を奪った鉱山災害により閉山しました。現在の台北は人々に華やかな印象を与えるにもかかわらず、飛躍的な経済成長をとげる時期、このような悲しいことがあったりして、先人たちの努力を忘れてはならないです。

甜水鴛鴦湖

内湖大崙頭山にある甜水鴛鴦湖は、緑色の水が豊富です。現在の様子を見ると、20 年前ここはドロドロな土と雑草に覆われていた乾燥の溜池であることが想像できないです。

ここは、以前内湖地区で最も高い水源でした。別名の『大埤頭』からも、かつての灌漑用途がわかります。住民に豊富な水を提供するだけでなく、多くの鴛鴦の群れもここに住んでいました。しかし、1983 年から周辺から水漏れが発生し、溜池は一時的に干上がり、鴛鴦の群も消えていきました。溜池はもはや住民の水源として主要なものではなくなり、鴛鴦湖は山間に放置され、以来、誰も訪れたり気にかけたりしなくなりました。

2008 年に台北市政府のチームによって二年間の工事を取り掛かりました。清掃に加えて、比較的単純で伝統的ではあるが環境に優しくないセメントをベースに使用せず、防水性が高く環境に優しいジオシンセティッククレイライナーに置き換えて池底を修復しました。 その時、その努力が実を結び、復元された溜池は、知る人ぞ知る静かな秘境へと変貌を遂げました。

大切な人や気になる人を誘ってここに訪れてみてはいかがでしょうか？もしかしたら、ペアで泳ぐ水鳥を見ることができるかもしれません。水鳥はお尻を揺らしながら湖面を楽しんでいます。これ以上のロマンチックな場所はありませんね！